

## 『第11回医学科同窓会主催学生向け講演会』に参加して

医学科 5 年次 大 城 知己都

5月15日の金曜日、私たちは同窓会が主催してくださった学生向けの講演会で、医系技官というお仕事について伺いました。

恥ずかしながら、自分が医系技官という職業を知ったのは、この講演会が初めてでした。医学部を卒業したら大半が臨床、一部分の人は基礎、という大きく分けて2つの選択肢しか知らなかった自分にとって、医系技官という職業は、目から鱗が落ちるほど新鮮なものでした。

医系技官とは、「人々の健康を守るため、医師免許を有し、専門知識をもって、保健医療に関わる仕組み作りの中心として活躍する行政官」とされています。日本には約30万人程度の医師がいると言われていますが、その中で医系技官として働かれている方は、わずか150人程度です。医系技官は臨床現場と法律や制度を橋渡しする存在として、医療をとりまくシステムがよりよく改善されるように日々務めていらっしゃいます。

島根県健康福祉部健康推進課長である知念先生が医系技官を目指されたきっかけとして、在学中にミャンマーに行かれ、その当時軍事政権下にあったミャンマーで、さまざまな医療システムの不条理さを感じたことを挙げられていました。自分も去年の夏に公衆衛生の基礎配属としてネパールに3週間行かせていただきましたが、そこで感じたことは、現場での医療を改善する以前に、国全体として改善すべき問題が山積しているということでした。目の前の1人1人の患者さんに向き合う臨床医の仕事もちろん重要ですが、国全体として教育やインフラ整備、情報提供などに力を入れることによって、患者数の減少、もしくは病気の早期発見を目指すという一次予防・二次予防の公衆衛生の重要性をそこで強く感じました。

琉球大学から、医系技官になられたのはまだ知念先生お一人しかいらっしゃらないとのことでしたが、同じ大学の先輩が、在学中に自分と似たようなことを感じ、そして実際に行動に移して働いていらっしゃるというお話を聞くことができ、自分の将来を考えるうえでとても勇気づけられました。

また、亀山先生は高校生の時に阪神淡路大震災・地下鉄サリン事件という大災害・大事件をきっかけに危機管理型医療について関心を抱かれ、その後救急の現場でご活躍されていましたが、人事交流として2年間の予定で、厚労省医政局医療計画課で救急医療対策専門官として働かれていらっしゃるとのことでした。人事交流とは現場の実情を踏まえた政策の立案を行うために、専門的な知見・経験を有する医師を受け入れることで、全国のさまざまな大学等から、約50名の人事交流者が厚生労働省内で勤務されています。このようなきっかけから厚生労働省で働く方法もあるのだということも今回初めて知り、自分の将来についての選択肢がとても広がった講演会でした。

最後になりましたが、このような素晴らしいお話をご講演してくださいました知念先生・亀山先生、本当にありがとうございました。

医学科 4 年次 安次嶺 栄 人

まず初めにこの講演会を開いていただいたことに感謝の意を申し上げたいと思います。

最初ポスターでこの講演会を知った時、医系技官という職業がどんなものかわからず、進路を真剣に考えてというよりは医学部を卒業した後医師以外の選択肢というものがあることに興味が湧き、好奇心で今回の講演会に参加しました。

医者が行政に入って仕事することにイメージが湧かず、現場の声を聞いて国の仕組みづくりをしていくことは、初めは医者の仕事とはまったく違うように感じられましたが、問題を明確にし、様々な事柄の関連を考慮した上でエビデンスに基づいて政策を行っていく問題解決のアプローチが医師の診断に似ているように感じられたことが興味深かったです。

また、がん検診などの受診率を上げるPR活動でいかにその大切さをわからない人にわかってもらうように伝えるかといったことを考えることはマーケティングにも似ていて医学以外の分野の勉強の必要性を感じました。

講演が終わった後に少し直接お話をさせて頂きましたが、臨床にいた時に比べて感謝されることが少なくなったが、大きな集団の問題に対していい